

## 住友・別子銅山のこと

薬学雑誌 1903年度(明治36年) p 728-732

住友グループで一番力を持つのは、住友金属だという。元禄時代に開かれた伊予の別子銅山がその前身で、ここから精錬、輸送、電気、機械、商取引、金融と広がり、住友発展の基となったからだ。幕府の長崎貿易の代金支払いが銀から銅に代わると、銅が最大の輸出品になり、別子銅山は貿易や明治以降の我が国近代化に大きな役割を果たした。皇居前広場の楠正成像は、1900年に別子の銅で献納されたものである。

5頁にもわたる薬誌記事は鉱山沿革から始まる。もともと寛永年間より大阪屋何某が立川銅山を経営していたが、元禄3年(1690)、住友の田向重右衛門が隣接する山に入り、採掘開始したという。元禄8年、両坑が偶然貫通し、協議の末、住友が譲り受け、以後発展を続ける。

明治に入ると採掘の機械化が進み、鉄道、電信電話が敷設され、水力発電による電灯がとるなど、文明開化の最先端をいった。各坑道の延長合計は明治35年頃で5,867mだっ

たと書いてある(ちなみに、鉱山は操業が即ち坑道伸長だから、1973年の閉山時には全長700km、深さ海拔マイナス1,000m—我が国で人間が到達した最深部—に達していた)。

鉱石は、よもぎ鉛、石地上鉛、そばかわ鉛など11種類あって、それぞれの銅、鉄、硫黄、硅酸、アルミニウムの含量が表になっている。どの鉱石も鉄と硫黄が多く含まれ、銅含量は1%(しまがく鉛)から18%(上鉛)くらい。また、精錬方法の解説もあり、各段階、すなわち生鉱(銅7%)、焼鉛(34%)、稠密鉛(75%)、粗銅(98%)、精製銅(99.7%)の分析表もあるところが薬誌らしい。

鉱山には住友による「地方稀に見るところの良き病院」があり、「私立小学校」も別子山のほか、精錬所のあった新居浜、四阪島にも1つずつあった。ただし別子山小学校の生徒は「草木の名を知らず、雀とは如何なるものなるや、米麦は如何なるところに生ずるやをも」知らなかった。なぜなら、「亜硫酸ガスのため、一の草木なく、付近山上、一面の沙漠のごとき故なり」。

小林 力